

危機の連鎖と 資本主義の将来

資本主義は科学技術の発達と経済成長を前提に発展してきた。九〇年代に入り、社会主義体制の崩壊とともに新興国が資本主義に参入し、米国内産階級の生活をモデルに経済成長を目指している。しかし、その米国内産階級は八〇年代以降たび重なる経済危機に襲われ、今や長期停滞の兆候さえ見られる。地域統合のモデルとなるはずのEUは危機的な状況にあり、新興国のキャッチアップのモデルとなるはずの日本は二〇年にわたる経済停滞に苦しむ。科学や技術の発達は組織を複雑化し、地震や水害などの頻発する自然災害の被害を破局的なものにし、持続可能な世界のエネルギー供給や環境の維持に疑問を投げかけている。危機の克服には文明史観を踏まえた長期ビジョンが必要なのだ。そこで今回は、このような資本主義の成長モデルの行き詰まりをどう解決するのかをじっくり考えるのに参考になる、歴史的認識をベースに幅広い視野で問題を分析する近著を三冊紹介したい。

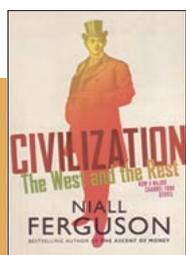
歴史学者ニアル・ファーゲソン、ハーバード大教授は、フォーリンア

フェアズ二〇一〇年三月号で、歴史上繁栄した帝国はすべて、そのシステムの複雑化と共に臨界点に達し、自ら突然崩壊していく歴史パターンを読者の前に示し、米帝国がその兆候を示すことに警鐘を鳴らした。近著①で同氏は、一五世紀まで世界の文明をリードした東洋に代わり西洋が栄えるようになったのは、六つの斬新で複雑な制度を形成する知識や行動が確立したからだとする。(1) 国家や企業間の競争の仕組み、(2) 自然社会を解明し変革する科学、(3) 私的所有権を守るルール、(4) 人の寿命を延ばす医療、(5) 物質的生活のモードとしての消費社会、(6) プロテスタンティズムの労働倫理、である。本書では、これらの六つの分野の発達の歴史的事例が興味深く展開される。最後に、西洋文明は他の文明からの挑戦ではなく、自らの短慮により没落する恐れを指摘する。

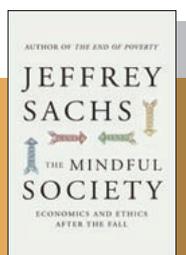
ジェフリー・サックス、コロンビア大教授は、途上国の持続可能な開発を提唱する経済学者である。最近では、中間階層の利害が米民主主義経済の基盤であるとして、格差の拡大でこれを破壊するウォール街や大企業を批判し、反格差のウォール街占拠闘争を支持する。近著②では、

自分が三〇年間学んできた途上国の開発経済理論を、先進国米国に適用する本を書くことになるとは思わなかったとしながら、米国はその経済問題の解決に、長い時間と道徳や倫理の回復が必要なことを指摘する。銀行の社会責任の回復、社会的サービスの分権化、富裕層の課税強化などの、米国内産階級を持続可能な経済に戻すための具体策を提言する。

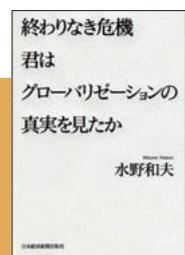
我が国では、成長経済に戻ること前提とした短期的な経済刺激策の提言が主流であるなか、在野のエコノミスト水野和夫は歴史的視野での分析を続けてきた。近著③は、成長と利潤率の拡大を所与の要件とする資本主義が、常にその活躍の場として新たな空間を求めてきたことを、一六世紀と二一世紀のグローバルゼーションを比較しながら展開する。実物空間を失った二一世紀の資本主義は、ITや金融の仮想空間に未来の利益を先取りした結果、バブル依存症に陥った。そこでは、欧米資本主義を全地球化した結果、もはやフロンティアは存在せず、危機は終わらない。問題を解決するのは成長ではなく、長い時間をかけた持続可能な新たな秩序の生成であるとする。



① Civilization: The West and the Rest
Niall Ferguson
Allen Lane, 2011



② The Price of Civilization: Economics and Ethics After the Fall
Jeffrey D. Sachs
The Bodley Head, 2011



③ 終わりになき危機：君はグローバル化の真実を見たか
水野和夫
日本経済新聞出版社 / 2011年9月